さよなら地平線

絶無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さよなら地平線

【Ｎコード】
Ｎ８７２５Ｙ

【作者名】
絶無

【あらすじ】
「世界を旅して回りたい」と日本を出発したバックパッカー、石米康史。何故か石米と共に旅することになった、謎多き中国人美少女ミン。石米本人もわからない、心の奥底にある「自分が旅に出た理由」は一体何なのか。ミンは何故石米と共に旅をしているのか。様々な街で出会う、数多の旅人達。出会いと別れを繰り返し辿り着いた旅路の果てに、二人が胸に抱く想いは……。中国各地を駆け巡る、二人の旅行記。
※この物語はフィクションです。しかし、ミンは今も、貴方が旅立

つのを待っているかもしれません。

旅立ちの日

正直、現状が全く理解できない。
俺はそっと自分の腫れ上がった左頬を撫ぜた。
まだ痛みは治まらない。
こんなにも空気は澄んでいるというのに、それが逆に頬をヒリヒリと刺激する。
こんなにも海は青々としているのに、それが逆に俺の心をもブルーにさせる。
どうして俺はこんな目に遭ってしまったのか？

本当に、何故。

事の発端は一時間前……いや、十日前に遡ったほうがいいだろう。
俺は後期の試験を終え、かねてからの計画を実行に移そうとしていた。
「大学四年になる前に、アジアを一周する」
たいした理由はない。ただ単純に旅に出たかった。
どうして旅に出たいかは、自分でも分からなかった。
友人からは「若気の至り」だと言われたが、若気、結構ではないか。
どうせ大学を卒業したところで、普通の日常を送るだけだ。
だったら自由のきく間に好き勝手やったほうが幾分もマシだろう。
今回設定したのは、
中国→パキスタン→インド→バングラデシュ→タイ→カンボジア→ベトナム→中国
というルートだ。

はっきり言えばバックパッカーにとっては、数多の先人が歩いた一般的なルートである。
しかし「何か凄い冒険になるのではないか」と、今後の旅路を思うだけで、俺はときめいた。
言い古された表現だが、「期待と不安で胸がいっぱい」というのが、その時の心情を正確に形容していた。

中国の観光ビザをとり、必要な荷物を調えた。
約二年の旅を予定している。日本にいる間に、揃えられるものは準備しておきたい。
ガイドブックを参考にしながら、新品のバックパックに必要となるであろうものを詰め込んでいく。
出発の前日には、友人が送別会を開いてくれた。
日本のビールも飲み納めか、こいつらも次会うときは社会人か。
人と全く同じ人生なんてある訳ないのだが、それでも一般的なレールからは大きく外れることになる。
一抹の寂しさを胸に去来させながら、この会はお開きとなった。

そして、出発の日を迎えた。

まずは夜行バスで大阪に向かう。
最初の目的地、中国へは、大阪発のフェリーを利用するのだ。
このフェリーは二泊三日で上海へと航行するもので、飛行機に比べてずいぶん安い。
時間よりも金が惜しい現状にあっては、当然の選択と言えるだろう。

「ええと、石米康史（イシゴメヤスフミ）様ですね。こちらが乗船券になります。出航の三十分前にはお越し下さい」

国際ターミナルで乗船手続きを行い、イミグレーションを通ると、そこは乗船客であふれかえっていた。
日本人よりも中国人の方が多そうだ。ここから既に旅は始まっているのだ。
俺は武者震いを三回ほど済ませ、これから出会う世界に思いを馳せた。
そして、世界はいきなり俺に牙を剥くことになる。

船上の紅葉と中華料理

上海行きのフェリーは、思ったよりも綺麗だった。
俺が購入したのは二等和室。十人部屋である。
布団を床に敷き、みんなで雑魚寝をする訳だが、清潔に保たれてあり、特に不快でもない。
さらに船内にはゲーセンやらカラオケやらまで完備されており、俺のような大学生にとっては理想的な設備である。
といっても、そんな無駄遣いなどできる筈もない。
甲板へ出て海を見ているほうがよっぽど健全であり、旅情を感じることができる。

船は瀬戸内海を航行中である。
もうすぐ三月だとはいえ、まだ肌寒い季節だ。
黒いパーカーを着込み甲板に出てみた。
空高くには朧雲が広がり、海を見下ろせば光が波に舞っている。
右には本州、左には四国が迫り、所々に梅花の薄紅色が垣間見える。
三十分ほどぼんやりしていただろうか。
少し体を冷やした俺は、自販機でホットコーヒーを買い、再びベンチに腰を下ろして船上に広がる長閑な空気を満喫しようとしていた。

その時、足音が聞こえた。
音のほうに目をやると、一人の女が立っていた。
年は二十歳位だろうか。つややかな黒髪が風にたなびいている。
大きな目から発せられる視線は俺を貫き、
紅潮した頬と歪められた唇は俺に何かを訴えている。

明らかに怒っている。が、一体何に怒っているのか。
まずは話をしてみよう。
見たところ彼女は中国人で、日本語はわからないかもしれない。
しかし、たとえ言葉が通じなくても、気持ちはきっと通じる。
そうだ、明るく「ニーハオ」と言えば、全く問題ない筈だ。
「やあ、こんにちは！ニー……」
「※×△○※！！！」
俺の声は途中で遮られ、彼女が何かを叫んだ瞬間、俺は左頬に向かう強力な運動エネルギーを感じた。
気づけば、俺の顔には紅葉模様がくっきりと浮かび上がっていた。
ちょうどフェリーが、広島沖を進んでいる時だった。

そして今、俺はベンチに座り込んでいる。
コーヒーの缶を両手で包み込むが、既に温もりはない。
「一体なんだったんだ……」
突然（おそらく中国人であろう）女の子にビンタを食らったのだ。
何が何だかわからない。一体何だったのか。
脳を猛スピードで回転させるが、原因理由などわかろう筈もない。
「まあ、中国人は激情型だというしな…」
やはり気持ちとしては腑に落ちないが、この結論でけりをつけるほかないだろう。
ともかく船室に戻ろう。それから、この顔と心を治療しよう。
缶に残った僅かなコーヒーを飲み干し、やすらぎの場所を求めて俺は腰を上げた。

船室に戻ると、そこには数人の乗客がいた。
荷物の整理をする者、旅行本を読み耽る者、就寝中の者など、みな自由な時間を享受していた。
俺はとりあえず顔を冷やそうと、バックパックから濡れティッシ

ュを取り出し、痛む頬に当てた。
すーっとする。
気持ちいい。
外国では濡れティッシュが重宝すると旅行ガイドブックに書いてあったが、こんな時にも役に立つのか。本当にティッシュ様様だ。

「君、日本人？」
俺が濡れティッシュに感謝を捧げていると、急に声をかけられた。
「え？ああ、はい」
「どうしたの？その顔。何かあったの？」
「……まあ、ちょっと」

話しかけてきたのは日本人の女だった。
少し茶色がかった短髪で、年は二十代半ばといったところか。
女はそのアルトな声で、なおも質問を続ける。

「その荷物を見ると長期旅行者ね。ルートはどんな感じ？」
「上海から西に向かって、パキスタンへ抜けるつもりです。その後はインドへ」
「そうなんだ。何でバックパッカーなんか？もしかして失恋？」
「そんなんじゃないですよ。まあ何となく旅に出たかったんです」

甘えられるお姉さんとでも言おうか。
落ち着いて柔和に話す彼女を見ていると、不思議と心が和む。
まさしく癒し系であろう。
少なくとも、いきなり紅葉を食らわせるどこぞの女とは違う。

「諏訪夕子よ。よろしく」

「石米康史です。諏訪さんは何で旅に出たんですか？」
「私はね、料理人なんだよ。中華の。今はまだ見習いだけど。中国各地の色々な料理を食べ歩いて、いつか私だけの独自レシピを作りたいの」

そう言うと夕子はガイドブックを取り出し、パラパラとめくりだした。

「中華料理と一口に言っても色々あるのよね。当然これだけ広い国だもの。きっと日本人の　知らない食材や調理法が、いっぱいあるに違いないわ。あーもう、これとか凄く美味しそう。旅が終わったら確実に太ってるわね」

夕子の柔和だった話し方は、少しずつ熱を帯びた口調に変わっていき、雑談かと思っていたら、中華料理の講義になっていた。
講義は延々と三時間続いた。
その間俺は、頷いたり、相槌を打ったり、空返事をしたりし続けた。
夕子は一人、熱弁を振るっていた。
そして話し疲れたのだろうか。ちょっと休むといって自分の布団に戻っていった。

気づけばもう夜になっていた。
中華料理から解放された俺はふと窓外に目をやった。月が見えた。
自分でもどうしてだかわからないが、何となく「船上の月を眺めようか」と思い立ち、俺は再び甲板に向かった。

白いスカートの月下奇人

その日は満月だった。
柔らかな月明かりと波の音が甲板を包み込んでいる。
まるでそれは童話のように、世界が白と黒だけになる魔法をかけられたような不思議な雰囲気を醸し出していた。
俺はコーヒーを持って海を望んだ。
ぼんやりと黒い海を眺めていると、吸い込まれそうな気がする。
それは恐怖であると同時に、自ら危険を冒したいという願望でもあった。
そう考えてみれば、この風景は心の奥底にある自分の旅への想いを象徴していたのかもしれない。

その時、扉が開く音がした。
白と黒の世界への闖入者は誰だ？
俺がそちらに顔を向けると、そこにいたのは、あの女だった。
昼間、俺に紅葉をつけた、あの女だ。

「しまった……」

俺は思わず呟いた。
そもそも、何で俺は再びここに来たんだ？
今まで「月を見よう」とか思ったことは無かったじゃないか。
これが月の魔力というやつか？
とにかく、ここから離れよう。
君子は危うきに近づいてはいけないのだ。
俺は女に視線を向けぬよう、下を向いて歩き出した。

「まだいたの？　変態（ビエンタイ）」

女に呼びかけられた。
いや、ちょっと待て。
「日本語……できるのか？」
昼間は確か中国語で喚いていた筈だ。
「何か文句あるの？変態」
「……だったら何で最初っから日本語で言わないんだ！
ていうか、何だ、その変態ってのは！」
俺は大学で中国語の講座も履修していたから、日常会話くらいは何とかなる。
無論、変態（ビェンタイ）は日常会話には属さないだろうが、そういう言葉を覚えたがるのは、男には共通の心理というものだ。
「何言ってるのよ変態。私の飲みかけの缶コーヒーに口つけて喜んでたくせに」
「は？」
「だから、私がベンチに置いておいたコーヒーを、あんた飲んでたでしょ！」
「……」
「私の大好きなミルクコーヒーを飲んだ上に、変な想像してたんでしょ、どうせ！」
「……何か勘違いしていませんか？」
「なにをよ」
「お前のコーヒーって、あれじゃ？」
俺は二つ先のベンチを指差した。

そこには、ミルクコーヒーとカタカナで書かれた缶が月明かりに照らされていた。

「……」

「……」

「あ、本当だ。あれ私のだ」

「……ちょっと待て！じゃあ昼間俺の頬を思いっきり叩いたのは…」

「勘違いだったみたい」

冷たい風が俺の体の中を吹き抜けた。

日本を一歩出た瞬間、世界はこんなにも過酷になるのだろうか。

たとえ自分に非が無くとも、神は俺に罰をお与えになるのだろうか。

「いやー、前にも二回程同じことがあってね、一回はファミレスで、二回目は公園でね。何か変な男が、私が飲み終わったストローをいじってるの。てっきりあんたも同類だと思ちゃって、つい手が出ちゃった。不好意思（ごめんね）」

「ごめんじゃないだろ！」

「まあまあ落ち着いて。楽しい旅をしようよ！」

俺の怒りなどつゆほどにも気にしない様子で、女は小走りで欄干に歩み寄り、夜の海を眺めている。

一体なんだと言うのだ。完全に殴られ損ではないか。

何と自由奔放な女だ。

俺は女の姿を目で追った。

黒い髪はさらさらと、白いスカートはふわふわと風に揺られている。

月がまるでスポットライトを当てているかのように、女はこの暗

闇の世界で輝いていた。
気づかないうちに、俺は女の姿に見とれていたのかもしれない。
これも、月の魔力というやつだろうか……。

「ねえ、ちょっと写真撮ってくれる？」

女がカメラを持ってこちらに走ってくる。
あの完全に切れていた時とは違う、ひどく純粋な笑顔だった。
女を見ていたら、反抗する気もなくなった。
俺がカメラを構えると女はポーズをとった。
長い髪を左手で軽く押さえ、手すりに寄り掛かってこちらに眼差しを向けている。
撮れた写真の中に限って言えば、この女は月に愛されているかのようであった。

その後、数枚写真を撮ると女は「眠くなっちゃった。またね」と言って、慌しく部屋に戻っていった。
気づけば月は既に南の空高くに登っていた。

フェリー二日目は、荷物の整理をしたり旅行本を読んだり、「諏訪夕子の上海で期待できる料理ランキング」を拝聴したりした。
何回か甲板にも行ってみたが、あの女の姿は無かった。

そして三日目、俺たちを乗せた船は、ようやく上海に到着した。

お給料はパスポートで

フェリーは東シナ海から黄浦江に入った。
黄浦江は上海市内を蛇行しながら流れており、国際フェリーの船着場は、上流へ若干遡った所にある。
決して綺麗とはいえないこの川からは、上海の摩天楼が幾重にもそびえ立つ様子が見られる。
俺は船内で渡された入国カードを記入しながら、今後の予定について脳内でシミュレーションを行っていた。

大きなエンジン音を響かせながら、フェリーは接岸した。
タラップを降りると、そこは中国だった。
周りの看板は全て漢字で書かれている。
係員も、みな中国語を話している。
非日常がそこにあった。
ようやく、着いた。そして、始まった。
俺は自分の旅がいよいよ本格的に幕を開けたのを感じた。
胸の高鳴りが、止まらなかった。

イミグレーションの手続きはあっさりと終わった。
税関の職員は一人もおらず、検査もなかった。
俺がバックパックを背負いターミナルビルを出るや否や、中年の男が一斉に駆け寄ってくる。
「タクシー！タクシー！兄ちゃん、乗れよ。どこまで行くんだ！」
彼らは全員タクシードライバーである。
おそらくずっとここでフェリーの乗客を待っていたのだろう。

しかし、俺はここではタクシーに乗らない。
既にガイドブックで予習済みだ。
『駅や空港で客待ちしているタクシーは、ぼったくりの可能性が高い』
この状況は想定の範囲内であり、かつ俺はどう動くべきかも考えてあったのだ。
一見殺気立っているようにも見える男たちをかき分け、俺は一目散に大通りへと駆け出した。
何人かの男がしつこく声を掛けてきたが、適当に「不要(いらない)」等と口にしながら、その全てを振り切った。
そして無事、一台のタクシーを止め、予定していたホテルに向かった。

俺が考えていたホテルは、上海の中心部にあった。
開発の進む上海では、徐々に安宿と呼べるものは少なくなっている。
勿論全く無いわけではないのだが、外国人は宿泊できなかったり、どうしようもないくらい不衛生だったりする。
さすがに旅の初日からそんな所に泊まりたくはなかった。
金と環境を天秤にかけた結果、俺はとあるドミトリーを選んだ。
ドミトリーというのは、簡単に言えば相部屋である。
部屋単位ではなく、ベッド単位で料金が決まっている。
このホテルは1ベッド五十元。日本円に換算して七百円程度だ。
立地条件も悪くないし、物価の高い上海においては理想的だった。
天秤の両方を手に入れられる訳だ。
しかし、思わぬ誤算があった。

俺が乗ったタクシーの運転手は、どうも道がよくわからないようで、途中何回か俺にガイドブックを求め、時には通行人に道を尋ねていた。
何とかホテルにたどり着いたものの、その時には時間もメーターも予定を大きくずれこんでいた。

上海中心部といっても、ホテルは繁華街から一本裏路地に入ったところにあり、静かで落ち着いた佇まいをしていた。
ドアを開けて中に入ると、安ホテルらしからぬ、明るい雰囲気のロビーがそこにあった。
欧米人旅行者がソファに腰掛けパソコンをいじっているのを見ると、まるで自分がヨーロッパにいるかのような錯覚すら覚える。
さあ、まずはチェックインだ。

俺がフロントに向かおうとしたとき、見たことのある黒髪が目に入った。
黒髪はロビーでアイスコーヒーを飲んでいる。
ソーサーの上には、クリーミーパウダーの袋が幾つも置かれていた。
俺は、その持ち主が誰なのか一瞬で悟った。
そして、いかに自分が行動するべきか、フル回転で考えた。

ア. 「こんにちは」と、最低限の挨拶で済ます。
イ. 「こんにちは！あれ、一人なの？」と少しだけ会話する。
ウ. 「こんにちは！あれ、一人なの？キミみたいな可愛い子が一人だなんて！よかったらお茶でもどう？」と、ドラマでしか見たことのないナンパ男を気取ってみる。
エ. 無言で通り過ぎる。

……エでいこう。下手に接触を持つと、碌なことにならない気がする。
いや、絶対ならない。
ましてウを選んだときには、俺の旅は上海でゲームオーバーになるだろう。
下手をすれば身体的苦痛だけでなく、金銭的苦痛さえも得ることになる。
確かに、この女は可愛い部類に入る。
しかし中身はありえないレベルまで達している。
そうでなかったらいきなり平手打ちを食らわせることがあるだろうか？
ここはそっと横を通り過ぎ、何か言われたら、気づかなかったで済ませばよい。

俺はそのつややかな髪の横を、視線はそちらに向けず、できるだけ足音も立てず、気配も極限まで消し去りながら、それでも平静を装うという、非常に難易度の高い方法で歩いた。

結論から言おう。俺の作戦は失敗に終わった。
俺が精神を集中させてハイレベルな歩き方をしていると、「あ、落ちましたよ」と声を掛けられた。
俺はあわてて黒髪のほうを見た。
その刹那、目が合ってしまった。
なんのことはない。
落し物をしたのは俺ではなく、向こう側から歩いてきた初老の白人男性だったのだ。
彼はルームキーを拾い上げ、女に「サンクス、ガール！」などと言って外に出ていった。

俺は、動揺していたのだろうか。
そのまま行けばいいのに、何故かそこで立ちすくんでしまった。

「あら、あなたは……」

おもいっきり顔を見られた。
こうなっては選択肢エを選ぶことはできない。
ここは選択肢アに切り替えよう。

「やあ。こんにちは。久しぶり。じゃあまたね」
挨拶を棒読みし、そのまま踵をかえそうとした瞬間、

「待って！」
腕をつかまれた。

「お願いがあるんだけど」
「え？」
「あなたのパスポートが欲しい」
「は？」

何を言ってるんだ、こいつは。
俺のパスポートが欲しい？
確かに日本人のパスポートは高値で取引されるらしいが……。
もしかしてこいつは中国マフィアか何かなのか？

「勘違いしないで。私の代わりに、このホテルのチェックインをしてほしいの」
「そりゃ何でまた？」
「……私、身分証をなくしてしまったの。だから、泊まりたくても泊まれないの」

中国でホテルに宿泊する際には、外国人ならパスポートを、中国人なら身分証を必要とする。
それがなければ、ホテルを利用することができず、最悪の場合野宿をすることになる。

「だけど、もし私が『あなたの連れ』という設定なら、問題ないでしょ。高級なところならともかく、安ホテルの場合には誰か一人が身分証を出せばいいんだから」
「まあ、理屈としてはわかる。でもな……」
「その代わり、ここに泊まっている間、私は通訳兼導遊（ガイド）になってあげる。こんな可愛い子が一緒に観光してあげるって言ってるの。滅多に無いことよ」
「ちょっと考えさせ……」
「私、かわいそうだと思わない？もしここで断られたら私、夜の上海に投げ出されるのよ」

間髪いれずに女は畳み掛けてくる。

「そりゃそうだけど……」
「じゃ決まりね！さっさとチェックインしましょ！」
そう言うと女は俺を引っ張りながら、フロントの方へ向かう。

「私は日本人のフリをしているから、あなたが手続きをやってね」
女に圧倒され、俺は言われるがままにチェックインをした。
幸いと言おうか何と言おうか、このホテルのドミトリーは完全に男女別室になっている。
だからこの女と同じ部屋に寝泊りということはない。

「私、少しお腹が空いたわ。荷物を部屋に置いたら、またここで会いましょ」

女は一方的にそう告げると、エレベーターを降りていった。

俺は、ただ言いなりになっている男……いや、犬も同然だった。

ピザ屋の地好星

部屋に荷物を置いてから、俺はロビーに向かった。
別にあの女と行動を共にする必要は全くないのだが、もし今、たとえ一方的であるにしろ約束を違えるような事をすれば、確実にあいつは部屋に乗り込んでくるだろう。
絶対に面倒なことになるに違いない。
どう考えても今は、おとなしく従っておいたほうが得策だ。
しばらくすると女も一階に降りてきた。

「おまたせ。じゃあ行こう」
「どこに行くんだ？」
「まず食事ね。でも、ちょっと中途半端な時間だから、簡単なものでいいわ」

フロントのデジタル時計には、午後三時と表示されている。
確かに、俺はフェリーで朝飯を食べてから、何も口にしていない。
昼食をとる時間がなかったため、小腹が空いているのは事実だった。

「外を散歩していたら、きっと何かあるでしょ。南京路でも行ってみようか」

南京路というのは上海最大の繁華街だ。
歩行者天国になっているメインロード周辺にはデパートが立ち並び、若者や観光客で賑わっている。
俺たちが今いるホテルからは、せいぜい十分程度だろう。
女の提案に俺は同意し、早速上海の街に繰り出すことにした。

女はこの辺りの地理を弁えているのか、どんどんと進んでいく。
途中美味しそうな拉麺屋やら串焼き屋台やらがあったが、さすがにそれは重い。
少し腹に入ればそれでいいのだが……と考えていたら、
「ああ、あれがいいわ。あれにしよ」
女が指差した先は、大手ピザチェーン店だった。
「ちょっと待て。この時間にピザを食べるのか？」
「平気よ。スモールサイズを二人で分ければ没問題（だいじょうぶ）だから」
「いや、でも中国まで来て最初の食事がピザっていうのはどうだろう……」
「日本のピザとは違うから。絶対気に入るって！」
女はさっさと店に向かっていく。
俺の記憶が確かならば、女は俺の通訳兼ガイドだった筈だ。
普通、旅行会社のツアーだったら、「こちらがお勧めのお店です」とか言って客を案内するだろう。
それは往々にして有名店であるものだ。
それが「ピザ屋」というのはどうだろうか。
そもそも「日本のピザと違う」って何だ？
勿論イタリアと日本ではピザが違うだろうが、中国と日本でそんなに大差あるものなのか？
しかも「チェーン店」で。
しかし、あの女に道理を求めても無駄であろうことは、分かりきっていたことである。
俺はため息を一つついて、女の後に続いてピザ屋に入っていった。

「ご注文はお決まりですか？」
どこかメイドみたいな制服を着た店員が声を掛けてきた。
女はメニューを指差しながらオーダーをしている。
どうやら、ピザを一皿と飲み物を注文したようだ。

「なに飲む？」
「コーヒーでいいや。砂糖もミルクもなしの、ブラック」
「ええっ！苦いコーヒーなんて飲むの！？」

何を吃驚しているのだろうか。
本来コーヒーとはその苦味成分によって眠気防止や疲労回復の効果があるのであって、大量のミルクや砂糖で甘くして飲むというのは邪道である……などと言ってもしょうがない。

「日本の男なら普通に飲むぞ。っていうか、日本にいた時に見たことあるだろう」
「私の周りでコーヒー飲む人いなかったし、私も飲もうと思ったことはないの」

まあ、嗜好性は個人個人で様々である。
そこのところに突っ込みを入れるのは野暮というものだ。
いや、コーヒーより先に話題にすべきことがある。

「今更何だけど、俺まだ名前を聞いてないよな」
「ああ、そういえばそうだったっけ。では改めまして。私はコンミン。ミンて呼んでね」
「コンミン……漢字はどう書くんだ」
「……こうよ」

ミンは俺に携帯を渡した。画面には「孔明」と書いてあった。

「え……マジで？」

「そうよね。そういう反応をするわよね。全くうちの親は何でこんな名前をつけたのかしら。どうしてわざわざ三国……」

「すげえ！地好星じゃん！」

「……は？」

「水滸伝だろ？毛頭星孔明か！地味だし、代表的な好漢ではないけど、でも確実に仕事はやり遂げる。まさに縁の下に必要な人材だよな！」

「ちょっと、何言っているの？」

「北京侵入作戦とか、孔明がいなくては成しえなかったもんな。やっぱりお前も故郷は白虎山だったりする？家は大富豪？」

「少し、落ち着きなさい！！！」

ミンは俺の手を思い切りつねった。

手の甲から発した電気信号が瞬時に脳に達し、俺の口から声にならない悲鳴がこぼれた。

「まったく……。何の話をしているの」

俺は中国歴史小説が大好きだったのだ。

勿論、三国志も好きだ。西遊記も好きだ。

しかし俺が好きなのは、「目立たないがうえに、いい仕事をする人物」なのだ。

天才軍師の孔明よりも、田舎山賊の孔明のほうがよっぽど人間味があり、魅力を感じる。

「悪い悪い。水滸伝の中で俺、孔明ってかなりランク高いんだよ。ちなみに俺のベストファイブを挙げるなら……」

「もういいから。少し黙ってて。ほら頼んだものが来たわよ」
気がつくと俺の左側に、先程の店員が立っていた。
「ご注文の品をお持ちしました。ごゆっくりどうぞ」
ミンが注文したのは、チーズとベーコンのピザだった。
見た目だけなら普通のピザである。二人なら食べられそうな量だ。
俺は安心して一ピースを手に取り、味見程度にかじってみた。
「うん……悪くないな」
安心した俺は、今度は口を大きくあける。
「……！？」
……なるほど。ミンがいった「日本と中国のピザが違う」のがよくわかった。
チーズは普通だ。生地も日本と変わらない。しかし、ベーコンは違う。
中華風香辛料がたんまり使われている。
少しピリ辛なこのベーコンは、例えるなら麻婆豆腐である。
日本の中華料理店で出される、麻婆豆腐の上にかかっている粉末。
あれがベーコンに付着し、そのベーコンがピザの上に乗っているのだ。
確かに日本とは違う。
日本でピザを食べて、「あ！麻婆豆腐だ！」などという感想をもつ者はいないだろう。
所詮ピザ屋。されどピザ屋。
俺は中国文化の奥深さを、初日から味わうことができたのだ。

それは、俺の目の前に座っている女のおかげである。
その女は、食べかけのピザを皿に置いて、大量の砂糖とミルクを加えたコーヒーを啜っている。

「あ。私もういらないから。後全部あげる」

俺はテーブルの上を確認した。
俺の目の前には、取り皿とコーヒー（無糖）がある。
ミンの目の前には、取り皿と食べかけのピザ、後はコーヒー（白い）がある。
中央には、まだ四分の三も残っている麻婆ベーコンピザがある。

「もったいないから全部食べてね！」

俺の目の前にいるのは、やはり天才軍師などではなかった。
戦いの行方どころか、ピザの行方も計算できない、しかも自分の言葉に責任を持たない孔明だった。

南京路でみた微かな夢

大学生の男なんて、日本中にごまんといるだろう。
その多くはきっと何らかの悩みを抱えていると思われる。
例えばそれは、恋の悩み。
例えばそれは、将来の夢。
しかし、その悩みが「中国人の女に無理矢理ピザを食わされる」などという者は、これまでに存在しただろうか？
少なくとも俺が知る限り、そんな奇怪な人生経験を持つのは一人だけである。
その男は、つい先程まで口にピザを頬張り、ようやく今、胃に全てを流し込んだのだ。
旅をしていると、どうしても「無駄金を使いたくない」と考えるようになる。
男も例外ではなかった。
折角注文したものを半分以上残して店を出るという行為が、できなかったのだ。
そして、何ということであろうか。
連れの女は休む許可を与えず、「外でブラインドショッピングがしたい」と言い出した。
その男は半分涙目になりながら、会計を済ませて店の外に出た。
既に反抗する余力は残っていなかった。

俺は膨らんだ腹をさすりながら、ゆっくりとミンの後を歩いていた。
正直、もっとスピードを落として歩いて欲しい。
そんな俺の淡い希望は、少しだけ天に通じたようだ。
ミンは、こちらのウィンドウから、あちらの店先まで、いろんな

店の前で足をとめる。
おかげで俺は休み休み歩くことができた。
そして、俺に「反抗する余力」が若干戻ってきた頃、ミンは一軒のセレクトショップに入っていった。

「ねえねえ、この店、可愛い服が多いよ」
「そうか」
「もう三月になるもんね。今年の春服はどんなかな」
「そうか」
「あ！あの薄手のワンピース。凄くいい色してるね！でも、あれに合う靴はないなあ……」
「そうか」
「ちょっと！こっち来てよ！このカーディガン。色々な服に会いそうだし、絶対重宝すると思う！」

俺は適当に相槌を打っているだけなのだが、ミンはそんな俺の様子など歯牙にもかけないで、店の中を自由に飛び回っている。
この「適当な相槌」は、俺の微かな反抗であったけれども、全く効果は無かった。

「ちょっと。私、試着してみるから、荷物見てて！」

本当に自由な女だ。
いっそこのままトンズラしてしまおうかという思いも、一瞬脳裏をよぎった。
しかし、日本人特有の、よく言えば誠実さ、悪く言えば馬鹿正直さが俺にも備わっていたため、その行動に出ることは、俺の脳内会議で許可されなかった。
その時、試着室のカーテンが開いた。

「ねえ、この服どう？」

そこには、花柄のシャツの上にココアブラウンのカーディガンを重ね、デニムのショートパンツをはいたミンの姿があった。

「……ああ、いいんじゃないか？」

俺が言えるのは、それが精一杯だった。

その服は、ミンによく似合っていた。

だから、それ以上の言葉が浮かばなかった。

周りの空気を柔らかくするような、どこか春めいた感じ。

そんな雰囲気を漂わせていた。

「ん～、まだちょっとコレを着るには早いかな。でも結構いい感じなのよね。どうしようか、ちょっと迷うなあ」

俺は直感した。

ミンは俺に「おねだり」している。

俺は決して女性経験が多いほうではない。いや、むしろかなり少ない。

しかし、俺がこれまで見てきたドラマや映画を参考に組み立てた、俺の想像の世界では……こういう場面での会話は大抵このようになる。

「よく似合っているよ」

「そうかな……」

「ああ、とても。それを着たキミを、僕だけのものにしたいよ」

「うれしいわ……」

「さあ、このカードで買っておいで」

「わかった、愛しているわ！」

きっとこうなるに違いないのだ。
ただ、俺とミンはカップルではない。
更に言えば、俺は旅行者だ。
こんな所で身銭を切るのはどうだろうか。
……だが、客観的理屈がそうであるのは分かっていても、実は俺は心の奥底でかなり葛藤していた。

今のミンは、日本では滅多に出会えない程の美少女オーラを出している。これも運命と捉え、買ってやってもいいのではないか？しかし、これから俺は長旅を続ける身。こんな最初の所で色香に惑い、金を使っていいだろうか？やはりここは、毅然とした態度で臨むべきではないか？いや、しかしそれは金銭面しか考えていない非常に短絡的発想ではないだろうか？プレゼントくらい構わないのでは？いや……

俺がそんな自問自答を繰り返していると、

「ま、いっか。小姐（おねえさん）、これ下さい！」

ミンはあっさりその服を買ったのであった。

結局ミンは自分のカードで、カーディガン、シャツ、ショートパンツの三点を購入し、鼻歌交じりという上機嫌で店を出た。
俺は、別に自分が悪いことなど全く無いのだが、何故か「男のプライド」を傷つけられたような気がしてならなかった。
最終的にプレゼントするにしろ断るにしろ、あの場面で少しも「おねだり」されなかったことが、無性に悲しかった。
頼られない男ほど、むなしいものは無い。

俺のそんなセンチメンタルな気持ちなど、全くもって理解していないのだろう。
ミンは、相変わらずよくわからない鼻歌を歌っている。

既に時刻は六時近くになっている。
夕闇に包まれるにつれ、この南京路はさらに活気を増す。
どこから現れたのか、昼間よりも多くの人間がここに集まっている。
中には、明らかに贋物と思われるブランド品を売る者など、怪しい連中も紛れ込んでいるようだ。そんな奴等が、ミンに声を掛けてきた。

「キミ可愛いねぇ。でもそんな可愛いのに、そのカバンはちょっと地味じゃない？うちの店、ブランド物扱っているから、ちょっと見においでよ」
「どうせ贋物でしょ？それに私、ブランドにはあまり興味ないの」
「まあまあ、ちょっとだけでいいからさぁ」

男はしつこくついてくる。
南京路の贋物売りは、日本人をターゲットにしていると聞く。
それは勿論、日本人＝金持ちという認識が、まだ残っているからだ。
こいつらは、日本語を話している観光客を目ざとく見つける。
きっと俺たちが日本語で会話しているのを聞いたのだろう。
それにしても、こいつは全然諦めない。
ミンはだんだん面倒くさくなってきたようで、一言も発さなくなった。
それでも、男が話をしようとすると、突然男が悲鳴をあげた。

「※○△▲×○！！！」

驚いた通行人たちが、振り返ってこちらを見ている。
ミンは振り返らずに、そのままスタスタと歩いていく。
俺が後ろを見ると、男はその場にしゃがみこみ、両手で右足の甲を押さえている。

「ミン、お前何やった？」
「簡単よ。ヒールの角で思いっきり踏んづけてやったの」
「……俺、現実世界でそんな事をする女に会ったのは初めてだ」
「ウザいあの男が悪いのよ。まったく、折角いい買い物をして御機嫌だったのに。ホント最悪。ねえ、一回ホテルに戻ろうか。少し疲れちゃった」

分かっていたことだが、この女は暴力的だった。
一瞬でも「可愛い」と感じたのは、夢の世界のことだったらしい。
さあ、ホテルに戻ろう。現実に戻ろう。
俺は自分に言い聞かせるように、ぶつぶつ呟きながらホテルまで歩いた。
途中ミンが不思議なものを見る目で話しかけてきたが、適当に流し続けた。

ホテルに到着し、エレベーターに乗ろうとするところで、俺は背後から声を掛けられた。

「石米君！」

振りむくとそこには、微笑みを浮かべながら手を振る諏訪さんの姿があった。

第一次火鍋会

諏訪さんはチェリーピンクのハイネックにジーパンという、旅行者らしい格好をしていた。

そして何故か、白人男性が一人、諏訪さんの隣に座っている。

「石米君もここに泊まってたんだね。フェリー降りたらさっさと出て行っちゃうから、誰か知り合いでもいるのかと思った。本当、偶然よね……まあ、ここは旅人の集まる宿だし、当たり前と言えば当たり前か」

「すみません。挨拶もなしに出て行っちゃいまして。それで、そちらは？」

「ああ、彼はクラウディオ。イタリア人よ。たまたまこのホテルで会って、ちょっと話をしていたの」

二十代後半といったところか。

クラウディオは片言でも中国語を話すので、英語と併せれば意思疎通は何とかなる。

一八〇センチ近い身長ながら、落ち着いていて人当たりは柔らかい。

俺のステレオタイプなイタリア人像とは、大きく異なっていた。

軽く挨拶を交わしてから、変にニコニコしている諏訪さんに尋ねた。

「こんなところで、何をしているんですか？」

「実はね、クラウディオ君が火鍋に挑戦したいって言ってるんだけど、二人だと人数的に厳しいかなって」

「火鍋？」

「簡単に言うと唐辛子たっぷりの激辛鍋のこと。やっぱり鍋料理は

大人数でつつくのがいいから、どうしようか迷ってたんだ。そこに石米君が来たからちょうどいいかなと思ったんだ。で、そちらの方は？」

諏訪さんの視線がミンを捉える。

「ああ、俺の通訳兼ガイドです」

俺は嘘はついていない。

ミンが自分でその役目を買って出たのだ。俺のパスポートと引き換えに。

諏訪さんが軽く会釈をすると、ミンも頭を下げた。

この女も最低限の礼儀は持っているようだ。

「それで、石米君。よかったら一緒に火鍋食べにいかない？」

「行くのは構わないですよ。ただ、一、二時間待ってもらえますか？まだお腹が空いてなくて」

南京路散策のおかげで随分腹もこなされたが、先程のピザはまだ完全に消化されていない。

「構わないよ。火鍋店は夜遅くまでやっているしね」

「じゃあ、九時にここで待ち合わせでどうですか？」

「ＯＫ！」

諏訪さんはクラウディオに俺たちがした約束の説明をしている。

俺とミンは二人を残し、「では、後で」と一声掛けてからエレベーターに乗った。

「ミン、お前どうする？一緒に行く？」

「気が向いたら行ってもいいわ。どうせ晩御飯まだ食べてないし。さすがにピザ二切れだと朝まで持たないだろうし」

それならもう少しピザを食べてくれれば……と喉まで出かかったが、それは言わないでおこう。

ミンが先にエレベーターを降り、俺も自分の部屋に向かった。

部屋に入ると途端に睡魔が俺を襲った。

無理もない。

今日はミンにつきあわされた結果、食べ疲れと歩き疲れが体に少なからず蓄積している。

約束の時間までまだ余裕がある。

本能的にベッドに横たわり、枕に頭を預けた。

俺はだんだんと微睡んできた。

瞼を閉じた。

瞼を開いた。

何時の間にか寝入ってしまったようだ。

時計の針は九時五分を指している。

一気に眠気が覚めた。

俺は大急ぎで支度を整え、エレベーターに飛び乗った。

「遅い！」

ロビーでは既に諏訪さん、クラウディオ、そしてミンが待っていた。

俺に大声で怒りを表明したのは、言うまでもなくミンだ。

「すみません。気づいたら熟睡しちゃってまして……」

「大丈夫。そんなに待った訳じゃないしね。さ、行こ！」

諏訪さんは別に怒っている様子はなかった。
クラウディオも、気にしてなさそうだ。
一人を除いて特に問題もなく、その一人を気にしても仕方がないし、必要もないだろう。
俺はほっとして、外に向かう三人の背中を追った。
しかし一点気になったことがある。
三人の背中のうち、二人が随分と仲良さげに寄り添っていたのだ。

諏訪さんが薦める火鍋店は、南京路の西側、南京西路にあった。
外見はモダンな作りとなっていて、鍋料理の店とは思えない佇まいをしている。
俺たち四人が店内に入ると、チャイナドレスを着た受付係の女性が席まで案内してくれた。
この店は火鍋の有名店であり、政界や財界、芸能界の著名人も時折やってくるそうだ。
丸いテーブルを四人で囲むように座り、暫くするとウェイトレスがメニューを持ってきた。
火鍋のメニューは、日本の鍋料理のそれとは全く異なる。
最初にスープを選び、その後に具を注文する。
具は一覧表になっており、客は好きなものの欄に何皿必要かを書き入れる。
書き終わったら、再び店員に渡せば、後は鍋と具が運ばれてくる仕組みだ。
今回注文を担当するのは、当然諏訪さんなのだが……横からミンが顔を出している。
「これとかどうですか？姐姐（おねえさま）大人？」
俺は思わずお茶を噴出した。

「お……お姉さま？」

何だ、今のは？

「何よ、変な顔をして」

その時の俺は、誰が見ても変な顔をしていただろう。

顔とはその人の内面を少なからず表すものだが、今俺の内面は、何故ミンが諏訪さんをそのように呼ぶのかという疑問。ミンがそんな言葉を口に出したことへの驚き。そして余りにもミンには相応しくない発言に対する哄笑。この三つで占められていた。

その全てが俺の顔に反映されているとしたら、それは明らかに変であろう。

「だって、お前……何でお前が諏訪さんをお姉さまなんて呼ぶんだ？」

「あんたが遅れている合間に、少しお姉さまと話をしたの。素晴らしいわ。中華料理という一つの道を究めようとする姿勢、努力することを怠らない強靭な精神。まさに私の理想とする女性だわ！……約束の時間さえ守れない誰かさんに爪の垢を飲ませたいくらいよ」

ミンは一人で興奮して話している。

諏訪さんとクラウディオは、その様子を微笑みながら見守っていた。

「お待たせしました。こちらが鍋と、ビールになります」

ウェイトレスが注文したものを運んできた。

いや、鍋は兎も角、アルコールはどうだろうか。

今のミンに飲ませるのは、危険な匂いを感じる。
俺が何か対策を練ろうとした矢先、諏訪さんがミンにビールを注いだ。

「ミンちゃん、お酒飲めるよね？」
「勿論です！」

最早、俺にはどうすることもできない。
自分の無力を悟った俺を尻目に、ミンは注がれたビールを一気に飲み干したのだった。

赤、白、そして赤

諏訪さんが注文したのは、鴛鴦火鍋というものだった。
鴛鴦とはオシドリ、すなわち二つで一つという意味を持っており、一つの鍋で二つの味を同時に楽しめるということを表す。
鍋は陰陽模様……韓国の国旗模様と言ったらわかりやすいだろうか。
中央で二つに仕切られており、一方には赤いスープ、もう一方には白いスープが注がれている。
白は日本でもお馴染みの白湯（バイタン）だが、赤は違う。
大量の唐辛子と香辛料がスープの中を縦横無尽に暴れ周り、食するものに過大な刺激を加えんとする、薄味を好む日本人にとっては非常に危険極まりないものなのだ。
だが、この凶悪なスープの他にもう一つ、今の俺に過大な刺激を加えそうな存在があった。
ミンだ。
たかだか一杯飲んだだけなのに、既に顔は赤い。
まだ理性はあるようだが、この女は酒によってどう豹変するのか、検討もつかない。

「さあ、お姉さまもどんどん飲んで下さい！」

コップが大麦で満たされていく。
諏訪さんはそれを手に取り、軽く一口をつけてから、俺を見た。

「しかし石米君もやるよね。こんな可愛いガイドを雇うなんて」

クラウディオにビールを注ごうとした俺の手が止まった。
今の発言は看過できない。

「騙されちゃだめです、諏訪さん。フェリーで俺の顔にビンタを食らわしたのは、この女なんですから」
「え……つまり、ビンタされるような事をしたってこと？」

諏訪さんは何か重大な勘違いをしているようだ。

「いえ、そうではなく……」
「まさか石米君がそんな人だとは思わなかった！いくらなんでもひどすぎるよ！」
「ちょっと待ってください！俺何もしていません！」
「……なんてね。冗談だよ！」

諏訪さんは慌てふためいた俺の顔を見て、ケラケラ笑い出した。
色白だった頬が少し赤みをおびている。
まさか、酒に弱いのは諏訪さんのほうだったのか？
当の本人は再びミンに酒を注いでいた。

「ミンちゃん、いい飲みっぷりだね。どんどん飲んじゃって！」
「わかりました！」

まだスープが完全に沸騰していないため、女二人は酒盛りムードに入り始めた。
クラウディオは、さすが酒にうるさいイタリア人と言うべきか、ワインを飲んでいる訳でもないのに、少しずつ味わうようにビールに口をつけては、色っぽい溜息を漏らしている。

「今更だけど、ミンちゃんて今いくつ？」
「今年で十九歳になりました。お姉さまは？」

「二十六よ。ミンちゃん、まだ十代か。羨ましいね、その肌！」

成る程。

俺が初対面の時に見立てた年齢は、ほぼ正確だったようだ。

それにしてもミンはまだ十代だったのか。

三つも下の娘に、いいようにあしらわれるなんて、我ながら情けない。

……十九？

「おい、ミン。本当にお前十九歳なのか？」

「そうよ。文句ある？」

「酒、飲んでいいの？」

「何言ってるの。大丈夫に決まっているじゃない」

ミンの話によると、中国では飲酒可能年齢は特別定まっていないらしい。

勿論、子供のうちは飲まないように指導されているが、具体的に何歳から飲めるという法律はないそうだ。

「だから、全然問題ない訳。明白了没？」

「わかった。ちなみにお前は何歳から飲んでたんだ？」

「結構最近よ。大人にならないと、お酒の美味しさってわからないものだし」

まだ十九のくせに……と言おうとした時、諏訪さんが号令を発した。

「さあ、煮えてきたから具をいれるよ」

まずは肉団子とウズラの卵、キノコに始まり、鍋の様子をみながら牛肉、豚肉、さらに各種野菜を加えていく。
白い方は普通だ。いたって平穏な匂いがする。
赤い方は……水面に気泡ができては消え、大量の湯気を噴出する様子は、まるでマグマのようだ。しかも、そのマグマの表面の半分は、唐辛子で埋め尽くされている。
視覚も料理では重要というが、本当にこのスープは見ているだけで辛くなってくる。
なるべく白いスープを食べようと思った時、隣の席から声がした。

「ユーコ、もう大丈夫かな？」

クラウディオだった。
彼の視線は赤い方に向けられている。

「大丈夫、どうぞ召し上がれ！」

諏訪さんの許しを得たクラウディオは、素晴らしい箸捌きで赤く染まった肉団子を捕まえた。

「……うん、美味い！辛いけど、美味い！」
「気に入ってもらえて何よりだよ。さあ、どんどん食べて！」

クラウディオが食べられるのなら大丈夫だろう。
赤いスープから肉団子と白菜、ウズラ、キノコを自分のお椀によそり、最初に白菜から箸をつけた。

「どう？」
「……はい、辛いです……」

それ以上、言葉が出てこなかった。
人はとてつもなく舌にダメージを受けたとき、言葉を発することができなくなる。
しばらくの間、俺は一言も話せなかった。
しかし、クラウディオは一体何者だ？
こんな過酷な料理を苦もなく食べ続けているなんて。
もしかして、ピザには大量のタバスコをかけるタイプなのかもしれない。

「石米君大丈夫？はい、ビール」

諏訪さんに勧められるや否や、俺はビールを飲み干した。
まだ口の中がヒリヒリするが、ようやく発声機能が正常に戻ったような気がする。

「この程度の辛さで参るなんて。情けないわね」

そういった本人は白いほうから肉を取り、ゆっくりと口に運んでいた。

「お前、人のこと言えないだろ？俺にも白いほうを食べさせてくれよ」
「何言っているの？男だったら赤一本で勝負しなさいよ。クラウディオだって食べているのにそんなこと言って恥ずかしくないの？本当にだらしない。もっと、しゃきっとしなさい！」

立て板に水の如く話すミンの顔は、既に真っ赤だった。目が爛々としている。
饒舌上戸とでも言おうか。口が一秒たりとも止まっていない。
普段から高いテンションが、より一層高くなっている。

……しかし、この気持ちは何だろう。
ミンに言われなくても、俺の中には「危険願望」とも言うべき想いがあった。
「赤が欲しい」
火鍋には、どこか中毒的なものがあるようだ。
大量の唐辛子と香辛料が俺の精神を毒し、理性を失わせ、おかしな気分にさせている。
気づいたときには俺のお椀の中には、赤く染まった具がすっぽりと納まっていた。
「私がよそってあげたんだから、残さないで食べてよね！」
ああ、わかっているさ。
俺は少しも躊躇せず、自分の目の前にある食材に箸を伸ばした。
食べては、飲み、食べては、飲み。
完全に火鍋の魔力に飲み込まれていた。

それから俺とクラウディオは無言で赤を食べ、ビールを飲み続けた。
ミンと諏訪さんは、白いスープを主体に、グラスを片手に、話に花を咲かしていた。
いつの間にか俺たちは注文したビールを全て空けてしまった。
「まだみんな飲めるよね？ビールでいい？」
「待ってユーコ、バイジウはどう？」
バイジウとは白酒という、アルコール度数の非常に高い酒である。
普通は、これだけビールを飲んだ後に注文する代物ではない。

しかし、女二人はビールに酔い、男二人は酒に加えて火鍋にも酔っていたため、通常の判断ができなかった。
店員が持ってきた白酒には「三十六度」と記載されていた。
飲ませ上戸の諏訪さんが、四杯のグラスに酒を注ぐ。
ぷんと、アルコール臭が鼻につく。
全員が「乾杯！」と叫び、一気にグラスを空にした。

それからのことは、はっきりと覚えていない。
うっすらと記憶に残っているのは、赤い具をひたすら食べたこと。白酒をひたすら飲んだこと。そしてひたすら飲み食いして真っ赤になった三人の顔。それだけだった。

老西門にて

明るかった。
窓から差しこむ白が、俺の布団に真っ直ぐ突き刺さっている。
まだ、痛い。
頭の中では暴れ馬が地団太を踏んでいるようで、一向に痛みが止まる気配がない。
立ち上がれない。
別に授業がある訳でもなし、バイトに行くでもなし。
馬が落ち着くまで、暫くベッドで横になっていよう。
そう思って、顔を日光に晒さないように寝返りをうった時、見覚えのある顔が目に入った。
そこに立っていたのはクラウディオだった。

「オハヨウ、ヤス。どうした、二日酔い？」

相変わらずの柔らかい口調で、クラウディオが問いかける。

「ああ、頭がまだガンガンする。しかし、クラウディオも同じ部屋だったんだな」

ルームメイトにクラウディオがいたことには、気づかなかった。
確かに、火鍋会に行く前も、帰ってきた時も俺はすぐに熟睡している。
いや、それ以前に帰ってきた時は、記憶すら曖昧である。
なんとなく、帰り道で喧しく騒いだような気もするが……。
もしかしたら、クラウディオが俺を部屋まで運んでくれたのかもしれない。

「昨日、クラウディオが俺を部屋まで運んだのか？」
「ヤスだけじゃないさ。ユーコもミンも泥酔してて、大変だったよ」
「そうか……。すまなかったな」
「なに、この位どうってことないよ」

クラウディオによると、俺たち四人は十二時まで飲み続け、その後歩いてホテルまで帰ったそうだ。
深夜の南京路は危ない連中も多いが、そんな所で俺たちは相当暴れたらしい。
諏訪さんが見知らぬ通行人に話しかけたりとか、ミンが大声で歌ったりとか、それこそ日本だったら警察に呼び止められるレベルである。
なお、俺自身が何かしたということは聞いていない。
それは本当に何もしなかったのか、イタリア紳士の優しさによるものなのかは定かでない。
しかし、それを聞いても意味がないし、警察の世話にならなかったのだから良しとしよう。
ちなみに、つい先程クラウディオは女子部屋にも行ってみたが、二人とも完全に熟睡していたとのことである。

「それでね、ヤス。実はちょっと頼みがあるんだ」

そう言うとクラウディオは一枚の絵葉書を取り出した。

「この風景の場所に行ってみたいんだけど、漢字が読めなくて」

その絵葉書には、どこかノスタルジックな街並みがあった。
右下に小さく「老西門」と書いてある。
老西門とは上海中心部にありながら、未だに大規模な開発もされておらず、下町情緒の匂いが強く残るという場所だ。

「ラオシーメン、だな。ここからそんなに遠くなさそうだ」
「成る程、わかった。有難う、ヤス！」
「もしよかったら俺も一緒に行っていいか？あと一時間も休めば活動再開できるから」
「それは勿論ＯＫさ。じゃあ僕は一階でコーヒーでも飲んで待ってるよ」

そう言うとクラウディオはショルダーバッグを手に、部屋から出て行った。
静かに目を閉じ、ゆっくりとベッドに体を預ける。
一時間。それだけあれば十分だろう。

目を覚まし時計を確認すると、ちょうどぴったりの時間だった。
頭の馬も既に疲れて寝ているらしく、痛みもない。
俺が身支度をし、一階に下りると、クラウディオはぼんやりと本を読んでいた。

「ああ、お目覚め。それじゃあ行こうか」

老西門は、南京路にある地下鉄の人民広場駅から、二駅のところにある。
少し歩くと、そこには上海の庶民の生活が存在した。
細い道の両脇には、三階建て位の住宅が並んでいる。
灰色だったり土色だったりするそれらの中は薄暗く、テレビの画面が眩しく見える。
まだ寒い時期でもあり、裸の木々と対照的に人々は厚手のダウンジャケットを着ている。

誰のも決して派手ではないため、土色の街に溶け込んでいるようだった。
どこか懐かしさを感じさせる、不思議な、空間……。
暫くの間、俺とクラウディオはこの街を歩いた。
無言だった。
まるで自分たちがセピア色の写真に入り込み、「ハロー」と声を掛ける小学生や、大声で麻雀をしている好々爺は全て写真の中の人物であり、俺たちが声を上げると途端に写真が破れてしまうような、そんな気がした。
ふと、一軒の古びたコーヒーショップが目に入った。
「ちょっと休憩しようか」
クラウディオの言葉で俺は現実に戻った。
お互いブラックコーヒーを注文し、竹で編まれた椅子に腰掛けて一息をつく。
「なかなか面白い所だったな。クラウディオ」
「そうだね、何と言うか、すごく懐かしい感じだった」
「本当？実は俺も懐かしさを感じたんだ」
「えっ、一体どこに？」
「それは……どこと言われても……」
懐かしさを感じたのは確かだが、どこと問われても答えようがない。
「僕は、あれさ」
クラウディオが指差した先には、道の真上に横断するように架け

られた洗濯物があった。
左右の家をつなぐように何本もロープが張られ、そこに十数枚の服が干されている。

「僕の家は狭い路地裏にあってね、やっぱりああいう風に洗濯物を干してたんだ。まさかユーラシアを横断して中国まで来たっていうのに、そこでこんな懐かしさを感じるなんてね。それで、どうしてヤスは懐かしさを感じたの？」

クラウディオの言うことは筋が通っていた。
俺は、一体何故懐かしさを感じたのだろうか？
自分が住んでいた街とは全然違う。
子供の時に見た風景という訳でもない。
あえていうなら、昭和三十年代の日本に近い、と言えるだろうが、俺はその時代を体験していない。
何だろうか、懐かしさの原因は。
まさか遺伝子が記憶しているアジアの風景に因るとでも言うのだろうか。

「まあ……“なんとなく”だな」

それ以上は言えなかった。

「言葉だけでは説明できないって事だね。そういうのもいいんじゃない？僕も『旅に出た理由』を聞かれて、うまく答えられなかった事があるし」
「旅に出た理由？」
「そう。“なんとなく”なら説明できるんだけど」

クラウディオの話はこうである。

彼の故郷は南イタリア、長靴の先端にあった。
家は代々唐辛子問屋を営んでおり、父親は頑固を絵に描いたような人だった。
高校卒業後に家を手伝うようになったが、もっと様々な事に挑戦してみたいと考えたクラウディオは、例えば新しい品種を植えてもらうとか、新規販促ルートを模索するとか、色々父に言ったらしい。
しかし、父親は首を縦に振らなかった。
結果、クラウディオは旅に出た。

「正直、自分でもよくわからないんだ。父への反抗心とか、自分の見聞を広めるとか、商売のネタを探そうとか、どれも正解であって正解でない。本当に、何故か旅に出たいと思ったんだ」

クラウディオだけではない。
俺だって同じだ。何故、旅に出たのか。

「少し寒くなってきたね。そろそろ戻ろうか」
「そうだな……」

勘定を済まし、俺たちは地下鉄の駅の方向へ足を進めた。
懐かしさも、旅に出た理由も、今の俺にはよくわからない。
土埃の舞う帰り道に漂う淡い匂いに、俺は懐かしさの原因が何なのか、ずっと問いかけていた。

ホテルに戻ると、十分に休養をとったと見られる諏訪さんとミンが、ロビーでお茶を飲みながら談笑していた。
その夜も、四人で諏訪さんの勧めるレストランへ食事に行った。
前日に劣らず、賑やかな晩餐となった。

次の日の朝、俺たち三人が見送る中、クラウディオは北京に向かって旅立っていった。

星無き街に光降る

それから三日程、俺はミンを連れ立って上海歩きに勤しんだ。
近代的高層ビルの立ち並ぶ外灘（ワイタン）や、中国文化を偲ばせる豫園、少し足を伸ばして、水郷の街として知られる朱家角にも足を運んだ。
なお、諏訪さんは俺たちに同行していない。
元々観光が目的でない為、小籠包（ショウロンポウ）の故郷だの上海蟹の養殖場だのを廻ってきたそうだ。
上海滞在六日目の朝、諏訪さんもその日の夕方に、クラウディオと同様に上海を離れることを、俺たちに告げた。

「正直、上海は大都市である分、目新しい食材は何もないんだよね。日本からも近いし、また来ようと思えばいつでも来れるし。それよりも私は、『日本ではマイナーな料理』を探すつもり。まずは西にある無錫に行って、乾隆帝が激賞したという『天下第一菜』というのを食べる。それから更に西に進んで、鎮江という街の特産である黒酢を堪能する。いろいろ、行きたいところはたくさんあるんだ」

諏訪さんの話す固有名詞はよくわからないが、兎に角あちこちを巡りたいことは理解できた。
三人で一緒に昼飯をとった後、俺は諏訪さんとメアドを交換し、どこかでまた会う約束を交わした。
お互い旅人であるため、はっきりと日時と場所を指定などできない。
もし近くに相手がいることがわかれば、それが再会の時である。

「今度は成都で会えたらいいね。また火鍋会できるし」
「それはちょっと……。本場はもっと辛いんですよね」
「まあ、ね。それよりも後でちょっとだけ話、いいかな？」

「いいですけど、何ですか？」
微かに顔が曇ったように見えた。何か重い話なのだろうか。
俺たちは一度解散して、三人が一旦自分の部屋に戻り、頃合を見計らって二人だけがロビーに戻ってきた。
「さっきの、話ってなんですか？」
「実は……ミンちゃんのことなんだけど」
「ミンがどうかしました？」
「確か、身分証を無くして、石米君が代わりにチェックインしたのよね」
「ええ」
「それって変じゃない？ミンちゃんはパスポートを持っている筈なのに」
「あ……」
確かにおかしい。
中国人は身分証がないとホテルには泊まれない。
しかし、代わりにパスポートを提示しても、全く問題ないだろう。
ミンは日本からの船に乗っていた。当然、パスポートは持っている。
「そう言われてみると……」
「うん。そもそも彼女が上海に留まっている理由も分からない。家族に連絡して迎えに来てもらったっていい。色々な選択肢がある中で、どうして石米君に近づいたりしたんだろう？何か複雑な理由でもあるのかもしれないね」
諏訪さんの分析は的を射ていた。
どうしてミンが俺に近づいたのか。

冷静に考えてみれば、不審な事ばかりだ。

「でも、ミンちゃんは悪い子ではなさそうなのも事実。石米君も上海を離れる日が来るわけだし、その時までに彼女をどう扱うか、しっかり考えておいた方が良いよ」

諏訪さんはこんな忠告を残してから、次なる街へ旅立っていった。

実は俺も、そろそろ上海を離れて、次の街に行こうかとは考えていた。

それでミンともお別れだとも、思った。

旅する者にとって、出会いも別れも日常茶飯事のことである。

ミンも、いつまでも俺の通訳兼ガイドをし続ける訳はない。

何かの事情があいつにあったとしても、能天気に笑っていることを考えれば、それほど重大でもないだろう。

もしかしたらパスポートでホテルに泊まれるのに気づいていないだけかもしれない。

今日の夜にでも、ミンに上海を発つことを伝えよう。

そう、決めた。

その夜、俺とミンは二人で夕飯に出かけた。

ただ、二人ともそれほど空腹感を感じていなかったため、腹ごなしのためにどこかに出かけようという話になった。

俺が選んだのは、上海環球金融中心。

世界で最も高い展望台を持つビルだ。

ホテルの近くでタクシーに乗り込み、運転手に目的地を伝える。

十五分程で、この天まで届くかのような高層建築物に到着した。
高い。
上体をどれだけ後ろに反らしても、全く先端が見えない。
このビルの高さは、四九二メートルと世界二位。
展望台に至っては、地上四七四メートルの高さにあって、世界一位。
中国人だけでなく、日本人を含む数多の外国人が、ここを訪れる。
中に入ると、そこには近未来的な彫刻と、近未来的な制服を着た案内嬢がいた。
まず最初にエレベーターに乗って九十四階まで登る。
かなり高速で運転しているようで、途中で耳がツンと痛くなる。
そこからエスカレーターを乗り継いで、百階の展望台を目指す。
「ねえ、もう大分高い所まで来てるよね。外の景色はどんなかな」
ミンは俺の気持ちも知らないで、ミーハーに騒いでいる。
この時俺は既に、明日旅立つ決意をしていた。
具体的にどの街に行くかは決めてなかったが、兎に角上海を離れるつもりでいた。
今日で、ミンともさよならになる。
後は、いつそれを切り出すかだけだ。
百階は宙に浮いていた。
正確に言うとこのビルは栓抜きの形をしており、この階の真下は空洞になっている。
その上、ここの通路はガラス張りになっているため、まるで宙に浮いているような感覚を覚えるのである。
展望台は夜景を際立たせるため、明かりは最小限に留めていた。

既に太陽は沈み、夜の帳が空を覆っていた。
眼下には眩いばかりの光の海が広がるが、上海の空気は濁っているため、空を見上げても全く星は見えない。
ミンは窓ガラスに両手をつきながら、じっと窓外に広がる景色を眺めている。
今、言おう。

右足を一歩踏み出しミンの名を呼ぼうとした時、光の雫が煌きながら落下し、弾けた。
大きな目から数滴ずつ、地表の人工の灯に照らされながら流れていく。
小さな口は何かを呟いているが、言葉は虚空を切り、俺の耳に届かない。

瞬く星のない漆黒の空の片隅で、ミンの涙は唯一の光だった。
まるで月のように光を反射し、見る者を釘付けにする。
何も、言えなかった。
見とれていたというのとも異なる。
憐憫の情が沸いたのでもない。
本当に、「心」を奪われていたのだ。

整えられた黒髪の載る肩は微動だにせず、目は真っ直ぐに西の方へ向けられている。
この気丈な女が、一体何を想って涙しているのか。
その答えは遠く果て、薄暗い地平線の彼方なのだろうか。

「ミン」

声を掛けるとミンは少し慌てた様子で、顔を袖口で軽く拭った。
その後に現れたのは、いつものミンの顔だった。

「ちょっと見てみて！凄い綺麗よね。やっぱり展望台は夜が一番だわ」
「ミン、俺、明日上海を発つよ」
一瞬、ほんの一瞬、動揺が顔に出た。
しかし、すぐに冷静を装い、
「そう。じゃあ通訳兼ガイドの仕事も終りね。私もそろそろ上海から移動しようかしら。次はどこに行こっかな」
「身分証はどうするんだ」
「まあ、あんたみたいなお人よしを探すわ。何とかなるわよ」
「俺みたいなお人よし、なかなかいないだろうさ」
「……何とかするから、大丈夫」
「よかったら、俺の通訳兼ガイド、もう少し続けないか？」
再び、ミンの顔に動揺の色が浮かんだ。
今度は取り繕うでもなく、素のままだった。
「何で？」
「だってほら、俺、そんなに中国語できる訳でもないし。旅は道連れというし」
「でも……」
「何か訳ありなんだろ？」
「……」
「俺は別にそのことについては、根掘り葉掘り聞いたりはしない」
「……」
「パスポートだって毎回出してやるぞ？」
「……何でそんなこと言うの？どうして？」

どうしてだろうか。
俺は何も考えてはおらず、ただ口が動いているだけだった。
しかしそれは、口先だけということではない。
むしろ、理性や打算を超えた、俺の本音が吐き出されていたような気がする。

「何でだろうな。“なんとなく”だ」
「“なんとなく”？」
「そう、“なんとなく”。つまりだ。俺はお前のガイドが気に入っていた。だから今後もガイドを頼みたいと言っている。その代わりに、ホテルのチェックインは俺がする。ビジネスライクに交渉しているつもりだが、不服か？」
「……本当にいいの？」
「そう言っているだろう？」
「……分かったわ。あんたのガイド、引き受ける」
「よし、商談成立だな！」

俺はミンに手を差し伸べた。
小さな白い手が、静かに握り返してきた。

元々別れを切り出すつもりだったのだが、俺はミンと旅を続けることになった。
それは俺の心の奥底で、こうなることを望んでいたからなのだろう。
だから、あんな台詞が口から出てきたのだと思う。
少なくとも、ミンともう少し同行することになった俺は、確かに喜んでいたようである。

「そう言えば、まだあんたの名前、ちゃんと聞いてなかったわね。」
「随分と今更だな。俺は石米。石米康史だ」

「イシコメね。では、イシコメ様。もう暫く私のガイドにお付き合いください！」

ミンが仰々しく一礼をした。

頭を上げたときのミンは、晴れやかに、どこまでも澄み渡った顔をしていた。

嘘つきマルコポーロ

朝、目覚めて後、まずシャワーを浴びる。
バックパックに私物を詰め込み、忘れ物が無いかどうか部屋をチェックする。
そして、エレベーターに乗り込み一階に降りる。
まだあいつは来ていない。

十分後、大きめのショルダーバックを肩から提げ、ピンクのスーツケースを引きずりながら、ミンが降りてきた。

「ごめんごめん。片付けに時間かかっちゃった」

俺もたかが十分位で怒るほど、気が短くはない。
チェックアウトの手続きはすぐに終わり、俺たちは一週間滞在したこのホテルを離れた。

昨日の夜、一度は複雑な表情をしていたミンだったが、それからは相変わらずの自由奔放だった。
一滴も酒を飲まなかったのだが、やたらとテンションが高く、始終目を細めて微笑んでいた。
おそらく、ミンには何か特別な事情があるのだとは思う。
しかしこの様子を見る限り、今すぐ危ない橋を渡ることは無さそうだ。
もしかしたら、特別な事情というのも杞憂に過ぎないのかもしれない。
ホテルを出てからもミンは、どうということも無く、普段通りのべつ幕なしに口を動かしている。

「ねえ、何処にいくつもり？」
「いや、実はまだ考えてない。予定は未定、それが旅人の誇りなのだから」
「……何かよくわからないけど。まあいいわ、とりあえずバスターミナルに行きましょ」

中国には勿論鉄道も走っているが、これだけ広大な大陸のこと、全ての街に駅がある訳ではない。
それに比べバスは、大都市だけでなく地方の小都市まで網の目のように張り巡らされている。
今回のように目的地の設定がない場合には、バスターミナルに行けば選択肢は多いのだ。
上海で最大のバスターミナルは、鉄道の駅の北側にあり、中国語で「長途汽車中心」と言う。
周辺の省、例えば江蘇省、浙江省に行く便が中心だが、中には北京や広州まで行くものもある。
電光掲示板には大量の行き先が表示され、大荷物を持った人々がそれを見上げている。

「さて、どうしようか」
「イシコメはどんなところに行きたいの？」
「そうだなあ、上海は空気が汚れていたから、できるだけ緑があるところがいいな」
「そうね……。だったら杭州にしましょうか。街の中に西湖っていうのがあって、周りは木々で囲まれているの。きっと空気も清々しいと思うわ。中国では地上の楽園とまでうたわれてるのよ」
「杭州か、確かに良さそうだな」
「ちょうど三十分後にバスがあるわね。急いで切符、買わなくちゃ」

ミンに急かされ、俺は窓口に並んだ。

こういうのは普通ガイドがするものではないだろうか、という思いもあったが、そんな事を期待するのは無意味だと分かっていた。
前の親父をぴったりマークし、中国人連中の横入りを阻止しつつ、ようやく窓口にたどり着き、何とかバスチケットを購入することができた。
発車まであと二十分。
飲み物やら菓子やらを売店で購入し、俺たちは杭州行きのバスに乗り込んだ。

バスは定刻通りに出発した。
すぐにミンはおねむになったらしく、タオルで顔を隠してから暫くして寝息をたて始めた。
それだけならよかった。
隣に座ったミンは、徐々に体勢が崩れていき、終には俺の肩に頭をもたれた。
顔にかかっていたタオルがはらりと膝元に落ちた。
そこには目をつぶった、完全に無防備なミンの顔があった。
この女は黙ってさえいれば、偏差値六十五はある美少女である。
俺だってこの状況は、決して、決して嫌ではない。
だが……下手な行動をとったら、それこそ洒落にならない事態に成りかねない。
肩と左腕に感じる柔らかさに耐え、時に垣間見えるあどけない寝顔に耐え、俺は必死だった。
本能と死闘を繰り広げる理性。
ひたすら理性を応援する俺。
「寝息が頬にかかる」「手と手が軽く触れ合う」といった本能反撃のフラグを必死に押さえつける。
そして、二時間半。
憔悴しきった俺と、熟睡したミンを乗せたバスは、ようやく杭州に到着したのである。

「どうしたの？何か疲れてる？」
疲れているに決まっている。
しかし、その理由をミンに伝える訳にはいかない。
確実に変態扱いされることだろう。
そうなれば、中国に来たフェリーの時と同様、顔に秋が来ることになる。
「バスの中で眠れば良かったのに。まあ、まずはホテルを探しましょ」
全く同感だ。
俺はガイドブックをぱらぱらとめくり、目ぼしい安宿を探す。
そして、ある程度見当をつけてから、バスターミナルを出てタクシーに乗り込んだ。

「ねえねえイシコメ。上海よりも街路樹が綺麗よ。空気もそこまで悪くないし」
「……ミン、頼むからその“イシコメ”っていうのはやめてくれ。まるでどこかの味噌坊主だ。そもそも正確には“イシゴメ”だ」
「じゃあイシゴメ、街路樹が綺麗だよ」
「……他に呼び方はないのか？」
「中国人なら名前に小（シャオ）をつけたり、リンリンみたいに名前を重ねたりするわね。イシゴメの下の名前はなんだっけ？」
「康史。健康の康に、歴史の史」
「中国読みだとカンシーね。じゃあ、カンカンとかは？」
「上野の初代パンダだな、それは」

「じゃあ、小康（シャオカン）は？」
「なんか病気の谷間みたいだな」
「全く我侭なんだから。一体何て呼べばいいのよ！」

ミンが切れだした。

「普通に日本語で、ヤスでいいよ」
「それこそ安っぽい名前じゃない……まあいいわ。じゃあ今度からヤスって呼ぶことにする」

そんな建設的だか破壊的だかわからない話をしながら、タクシーはホテルの前に到着した。
このホテルは、杭州中心に大量の水を湛える西湖の西に位置している。
杭州では珍しくドミトリーがあり、しかも値段の割りに清潔なので、バックパッカーには好評な安宿だ。
外見は中国風で、三月の若い緑によく映える造りとなっている。
俺たちは（正しくは俺が）チェックインをし、カードキーを受け取って部屋に向かった。
なお、ここのドミトリーは六人部屋で、一部屋に三台の二段ベッドが置かれている。
そして、なんとここは、男女相部屋である。
いや、男女相部屋は、世界のドミトリーでは、ある意味普通のことであり、上海が特殊なのだが。
ミンは一応、俺の連れという設定なので、フロントのスタッフも相部屋でかまわないと踏んだのだろう。
このことはミンも理解しているようで、普通に一緒に部屋に入った。
六人分のベッドのうち、二台に鞄が置いてあった。
幸か不幸か、少なくともミンと二人だけにはならなそうである。

荷物を置いた俺たちは、早速西湖の散歩に出かけた。
暫く木漏れ日の中を歩くと、湖が見えた。
僅かに波打つ水面には緑色が映し出され、そよそよと吹く風は若葉の匂いを運んでくる。
昔、高校の世界史の授業で学んだことがある。
『東方見聞録』の中でマルコポーロは、世界で最も美しい街として杭州を紹介した。
作中の表現には誇張が多いと言われるが、この景色は確かに素晴らしいものである。

その時、風に乗って、ある臭いが届いた。
厠と言おうかドブと言おうか、兎に角、嫌な臭いであることに変わりは無い。

「何だ、この臭いは……？」
「ああ、臭豆腐（チョウドウフ）ね。杭州の隣町に紹興ってところがあるんだけど、そこのは結構有名なのよ」
「チョウドウフ、噂には聞いたことがあるが……」
「水盆に米と肉をいれ、腐らせて培養液を作るの。その中に豆腐を何回も漬け、発酵させる訳。意外と美味しいのよ。あの清の西太后から、御青方という別名も賜ってるんだから」

西太后も、何を好き好んでこんなものを食したのだろうか。
この臭いはどう考えても、尋常でない。
納豆など比べ物にならないくらいの悪臭である。
これは早めに避難しないと、鼻がどうにか成りそうだ。
そう思っていた矢先に、ミンが臭豆腐を買ってきた。
「試しにちょっと食べてみなさいよ。絶対ハマるから」

目の前に現れた刺激臭。臭覚だけでなく、視覚的にも臭いを感じられる。
丁寧に断ろうとしたその時、ミンが俺の口に突っ込んだ。
「どう？」

涙が出てきた。
鼻がすうっとする。

拝啓　マルコポーロ様
貴方の褒め称えた杭州では、悪臭が蔓延しています。
これ以上、この街に過度な期待をさせるような文章はお止めください。

敬具

緑茶と金髪

五百年前のヴェネチア人に抗議の手紙を送りつけ、幾分かは気が晴れたものの、未だに鼻と舌は非日常を味わっていた。
俺が口にしたのは少しばかりだった筈なのに、一向に臭いは退かない。
ミンによると、今買った焼き臭豆腐はまだマシな部類らしい。
本当に強烈なのは、蒸し臭豆腐だと言う。
それは蓋を開けた途端に、目には鮮やかな青カビが、鼻には先程の二倍の厠臭が一斉攻撃を仕掛け、食する者を大好きか大嫌いのどちらかに二分するのだそうだ。
少なくとも俺は後者に属するのであろう。

いや、そんな事よりも、俺は今すぐホテルに戻らなくてはならない。
俺はできるだけ口を開かず、呼吸もなるだけ抑えて、踵を返した。
ミンは残った臭豆腐をパクパク食べながら、隣に並んで歩いた。

「どうしたの？食べないの？」

時々こちらに視線を遣るミンのきょとんとした表情から、そんな台詞が読み取れる。
しかし俺は無言で歩いた。
たとえミンが平気だったとしても、隣に女性がいるのに、こんな口臭を撒き散らすことができようか。
この刺激的な臭いと共に湖畔を散策するなんて、そんな恥を掻き捨てることができようか。
兎に角、今は歯磨きをすることが先決だ。

ホテルに戻るや否や、すぐさま日本から持ってきた歯ブラシセットを手に、洗面所に向かった。
中国製の歯磨き粉はあまり良くないと聞いたことがあったので、このセットは全て日本製である。
爽やかな空気が颯爽と俺の口に注ぎ込まれていく。
流石はメイド・イン・ジャパンだ。
悪しき臭豆腐にも負けはしない。
十分もすると、臭いの元はほぼ除去できたようで、いつも通りの口が戻ってきた。

部屋に戻ると、欧米人カップルとミンが話をしていた。
「歯磨きに一体どれだけ時間かけてるのよ。全くもう」
「別に構わないだろう、歯磨きに時間かけたって。それで、この人たちは？」
「彼がパヴェル、彼女がエリシュカよ。二人ともチェコ人。この部屋に泊まってるんだって。」
どうやらルームメイトということらしい。
二人とも流れるようなブロンドの髪を持ち、顔立ちも整っている。
しかし、中身は正反対のようである。
「石米康史です。どうぞ宜しく」
「パヴェルだ。ここで逢ったのも何かの縁。宜しく頼む」
パヴェルはがっちりした体つきをしており、握手を交わした瞬間、

「腕相撲は絶対勝てなさそうな」印象を受けた。明らかに体育会系だ。
それに比べて、エリシュカは大人しい。
体の線が細いため、華奢と言うよりもむしろ薄幸の少女を思わせる。

「二人は大学生で、東アジアの民俗学研究を専門にしているそうよ。日本語も中国語も、少しだけ学んだことがあるって」

ミンが紹介を加える。

「うむ。私たち二人は大学の同級生でね、共にアジア研究を行っている。この杭州はかつて南宋の都だったこともあって、昔の面影を今に伝えてくれる素晴らしい街だと思うね」
「へえ、ここに滞在して、結構長いんですか？」
「もう五日になるな。そうだ、もし良かったら後で緑茶でも飲みに行かないか？」
「緑茶？」
「そうだ。私たちはいい店を知っている」

パヴェル曰く、その店は龍井茶（ロンジン）を注文すると、店員がアクロバティックな方法でお湯を注いでくれるそうである。
茶館も伝統的な造りになっており、まるで清朝の頃に時遡ったような雰囲気らしい。

「そうですね。構いませんよ」
「よし、それでは日が沈んだら共に出かけよう。あそこは夜のほうが風情溢れるのでな」

俺に依存は無い。

ミンも「面白そう」と乗り気な様子だったため、今夜は四人でパヴェルお勧めの茶館に向かうことになった。

夜。

タクシーに乗って目的地に向かう。

そこは西湖の東側、ホテルから見れば湖の反対に位置する、河坊街というところだった。

成る程。パヴェルが勧めるだけのことはある。

この界隈は一千年前の杭州を再現しており、建物は木造の瓦葺、電気もできるだけ押さえ、暗い中に提灯が燈っている。

観光客が多いため、土産物屋が多々あって店名の入った旗をたなびかせているが、それも上海のそれとは全く異なる。扱っている品物も違うようだ。

例えば、

薬堂……漢方薬を扱う老舗。蔵の中にたくさんの珍薬が置いてある。

工師……粘土で自分の顔の彫像を作ってくれる。

傘屋……中国では有名なメーカーらしい。洒落た傘が並べられている。

……等である。

薄明かりの中、商店を冷やかしながら暫く歩くと、パヴェルが「ここだ」と足を止めた。

そこは、香港映画に出てきそうな、二階建ての茶館だった。

壁や階段は木で作られており、テーブルはガラスだが、椅子は竹で編んだものと、凝った造りをしている。

店員も皆、清朝の頃の衣服、即ち丸い帽子に青い服、まるでカン

フーでもやるかのような出で立ちだ。
既にパヴェルは顔馴染みになっているようで、すぐに店員に二階へ通された。
丸いテーブルを四等分するように座り、早速パヴェルが店員を呼んで何かを伝えた。

「今日でこの店は四回目でね、既に顔馴染みという訳さ」

笑いながら話すパヴェルに、俺は若干の違和感を感じた。
容姿だけなら、バロック様式の教会に通い、大通りに面したカフェテラスでエスプレッソでも飲みながら読書をしているのがよく似合う。
しかし、パヴェルの内面から発せられる独特の匂いは、完璧に中国、というよりもアジア的礼を有しており、それが一つ一つの動作の中でにじみ出ていた。
店員がメニューを持って来れば軽く頭を下げ、メニューを返すときも両手で渡す。
かつて日本人も持っていた礼を、パヴェルはその青い瞳の中に宿していた。

「お待たせしました。こちらが龍井茶です」

男の店員が四杯の茶碗を運んできた。
中国風の幾何学模様が描かれた茶碗には、別段おかしなところはない。
敢えて言うならば、日本と違って茶碗の中に直接茶葉が入っていることぐらいだ。

「まずは、香りを楽しもう。それから、少しずつ口に含んでいくんだ」

パヴェルの言うとおり、匂いを嗅いでみる。
ほのかな陽光の香り。
青々とした葉の香り。
それらが一体となって鼻をくすぐる。

「どうだ。いい香りだろう。でもメインはこれからだ」

パヴェルが杯を置くと、後ろに控えていた店員が一階に声を掛ける。
すると、やたらと長い注ぎ口のジョウロを持って、パヴェルの横に立った。
そして……

「わあ、好（すごいね）？害！」

最初に感嘆の声を上げたのはミンだった。
俺も思わず息を呑んだ。
店員は杯に背を向け、上半身を反らしながら背後にある杯を目掛けて湯を注いだのだ。
ミンは自分もやって貰おうと、お茶を全て飲み干し、店員を手招きした。
今度は、肩を軸にジョウロを何回転もさせ、決めポーズをとって注いだ。
俺たちが店員に拍手を送っていると、パヴェルが再び口を開いた。

「実は、隠し玉があってね……エリシュカ」

パヴェルが目で合図を送ると、エリシュカは軽く頷き、立ち上がった。

ブロンドの髪が軽く揺れる。
その細い指が、ジョウロを掴む。
そして俺たちが見つめる中、彼女のショーが始まった。

天賦の才を生かす術

流れる髪。
揺らぐ肢体。
輪を描くジョウロ。
茶の女神がそこにいた。
名を、エリシュカという。

エリシュカはテーブルの合間、せいぜい十平米くらいだろうか。
その限られた空間の中で伸びやかに、淡く、そして華麗に舞っていた。
少しも無駄を感じさせない動作の向こうで、エリシュカのフランス人形のようなすまし顔があった。
中国の茶館とフランス人形のエリシュカでは、全く不釣合いだと思う人もいるかもしれない。
しかし、エリシュカの動きは何故か、この背景に合っていた。
それは、彼女が「牡丹」だったからだろう。
ブロンドの髪と、白いワンピースが揺れると、それはまるで牡丹の花のようだったのだ。
杭州は元来牡丹で有名な街である。
この茶館にも、何箇所かに花が飾られていた。
その中でも最も大きく、最も美しくかったのがエリシュカだった。

女神は一通り舞い終わると、適温になった湯を俺たちの茶碗に注ぎ、何事も無かったかのように座った。
先程まで魂を抜き取られたかの如く静まり返っていた周囲は、彼女が席について数秒後に歓声を上げた。
客が皆、スタンディングオベーションをしていた。

「すごいじゃないですか！エリシュカさん！」
思わず、大声を上げてしまった。
彼女は少し驚いたようで、一瞬目を大きくしたが、すぐにうつむいてしまう。
するとパヴェルが恥ずかしがっているエリシュカの代わりに話し出した。
「エリシュカと私は同郷でね。幼馴染というやつなのだが、昔からエリシュカは『回る』ことが得意だったのだよ」
「回る？」
パヴェルによると、エリシュカの運動神経は壊滅的で、何をやらせても上手くいかなかった。
走ることもだめ、球技もだめ。
体も丈夫なほうでないエリシュカは、どちらかというと屋内で静かに本を読んでいることが多かったそうだ。
しかしある時、友達とスケートに行くことになった。
チェコは内陸国で、当然冬は寒い。
ほとんどの子供達はスケートは小さいときから馴染んでいる遊びであり、普通に滑ることができる。
エリシュカも上手ではないにしろ、最低限のことはできた。
最初は友達と手をつないで、ゆっくりと練習していたエリシュカだったが、友達がうっかりエリシュカの手を離してしまった。
しかも、その時に少しだけスピンがかかってしまったようなのだ。
友達は慌てたが、その目に飛び込んできたのは全く意外としか言いようが無い光景だった。
エリシュカは廻っていた、それもかなり速く。
両手は空に向かって伸び、両足の踵は揃えられている。

パヴェルによると、一緒に来た友達は皆唖然としていたらしい。
それはそうだろう。
見るからに華奢なエリシュカが、猛スピードで氷上を回転しているのだ。
とてつもなく変な光景だったと、パヴェルは言う。
運動神経ゼロ女だったエリシュカに対し、この一件以来、皆の見る目が変わったそうだ。

しかし、あくまでできるのは回ることのみ。
バスケをすれば、ターンはできてもドリブルはできない。
フィギュアをすれば、三回転までできるのに、片足で滑れない。
結局、エリシュカがその才能を発揮することは、今までなかった。

「それが、この店では店員が皆クルクルと回っていた。当然、エリシュカは思ったのさ。『私もやってみたい』ってね」
「……成る程、特技が『回る』ですか……」
「さらに言うと、ここの店員は太極拳を参考にしている。本来、太極拳で重要なのは円の動きだ。全ての動作は円運動から始まるのだ」

パヴェルは熱く語り始めた。

「当然ながら、武術である太極拳などエリシュカには到底不可能だ。しかし、この店ならば戦うことなど必要ない。思う存分、円運動を繰り返すことができる。これこそまさに、神のお導きだろう！」

エリシュカは微かに頬を赤らめ、静かに座っていた。
はっきり言って実生活では、何の役にも立たない特技である。
そんな特技を持つエリシュカが、故国チェコからこの店を訪れたのも、確かに運命というものなのかもしれない。

旅を重ねることで、人は自分の才能を生かす術(すべ)を見つけることができるのだ。

「すごいわぁ……」

ぼんやりと声を発したのはミンだった。
うっとりとエリシュカを眺めていたが、急に鼻息も荒く、早口で話し出した。

「私もやってみたい！エリシュカさん、教えて！」
「無理無理、ミン。お前では無理だよ」
「何でよ」
「エリシュカさんは、回ることについては天下一品だ。だけどそれだけではない。人に見せるとは、魅せること。自分の内面を表現することで、観衆を沸かせたんだ。でもミンの内面は、凶暴おん」
「だまらっしゃい！」

……な、と最後の一文字を発声しようとした刹那、ミンの拳が飛んできた。
それはそれは見事な円軌道を描いて、俺の顔に衝突したのだった。

俺が両手で鼻を押さえている間、ミンは自分のやったことなど意に介さず、エリシュカに一方的に話しかけていた。
その様子を見て、パヴェルが言った。

「面白い子だね。ミンさんは」
「そうですか？もしよかったら、引き取ってもらってもいいですよ」
「いやいや、二人の恋路を邪魔するほど、私は野暮ではないさ」

……何か誤解をされているようだ。
「いや、別にそういう関係では……」
「否定することはない。いつか、君らが成就するのを願っているよ」
俺らの何が成就するというのだ。
それは勿論、若い男女が二人で旅をしていれば、そうも見えるだろうが……
「ところで、明日は何か予定が入っているか？」
「え？いや、特には」
「そうか、明日私たちは、杭州の隣街である紹興にいく予定でね。既にタクシーもチャーターしているのだが、良かったら一緒に来ないか？」
紹興と言えば、紹興酒の街だ。
確か、ここから一時間弱のところだったと思う。
個人旅行の最大の弱点は、「交通費・食費等を割り勘できない」ことである。
だから多くのバックパッカーは、目的地が同じ場合には車をシェアする。
そうすることで、自分のやりたいことを安くあげられるのだ。
「そうですね。折角中国に来たのだし、美味しい紹興酒は飲んでみたいです」
「よし、交渉成立だ」
俺とパヴェルが交渉をまとめた時、ミン達は未だに練習をしていた。

一方はしなやかに、軽やかに舞っている。
一方はぎこちなく、たどたどしい動きをしている。
どちらがミンかは、言うまでも無いだろう。
必死に体を動かしているが、華麗さの欠片もない。
ミンよ、やはり武骨なお前には、エリシュカさんと同じようにはできないのだよ。
お前に出来るのは太極茶道ではなく、対極拳を極めるほうが合っているよ。

口に出せば、必ず見事な鉄拳が飛んでくるだろう。
俺は心の中で、そっとミンにアドバイスを与えた。
窓の外には、既に高く上っている月が、明るく輝いていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8725y/

さよなら地平線

2012年1月14日03時47分発行